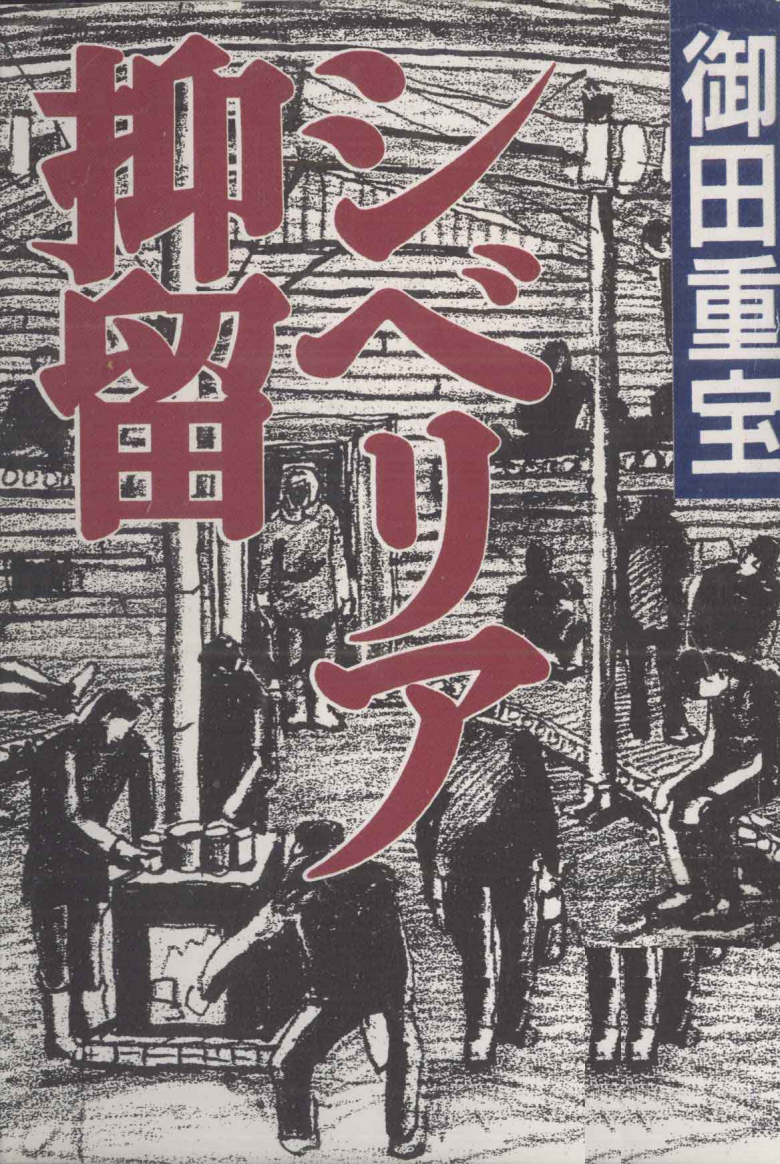


御田重宝

抑留入ア



|著者|御田重宝 1929年生まれ。中国新聞社勤務、解説委員。著書『戦艦「大和」の建造』(講談社文庫)、『ノモンハン戦(攻防篇・壊滅篇)』(徳間書店)、『ある社会主義者の一生』(三一書房)ほか。

シベリア^{よくりゅう}抑留

おん だ し げ た か
御田重宝

© Shigetaka Onda 1991

1991年7月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01

電話 出版部 (03) 5395-3509

販売部 (03) 5395-3626

製作部 (03) 5395-3615

Printed in Japan



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義

製版——豊国印刷株式会社

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社上島製本所

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えます。なお、この本の内
容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いい
たします。(庫)

ISBN4-06-184940-9



講談社文庫

シベリア抑留

御田重宝

目次

ソ連参戦

混乱の始まり 10

崩壊する関東軍 26

見捨てられた在留邦人 43

流浪する邦人

相次ぐ悲報 64

言語に絶する避難行 79

捕虜の輸送

ハーグ条約違反 102

だまされた「捕虜」たち 119

強制労働

苛酷なノルマ強制 136

自殺、脱走をはかる者も 153

飢えと酷寒の中で 166

抑留下の悲劇 184

つくられた「戦犯」 197

民主化運動

ソ連製「日本新聞」の創刊 222

ソ連主導の政治運動 237

巧妙な「洗脳」教育 254

人民裁判という名のリンチ 270

日本人同士を敵対させたアクチブ 288

エピソード・さまざまな影

スターリン批判の意味するもの 314

戦争の矛盾が生んだ悲劇 324

文庫版へのあとがき 332

解説 尾形幸雄 337

原挿絵 田中清養 地図 三宅悌司

シベリア抑留

北 極 海



ソ 連

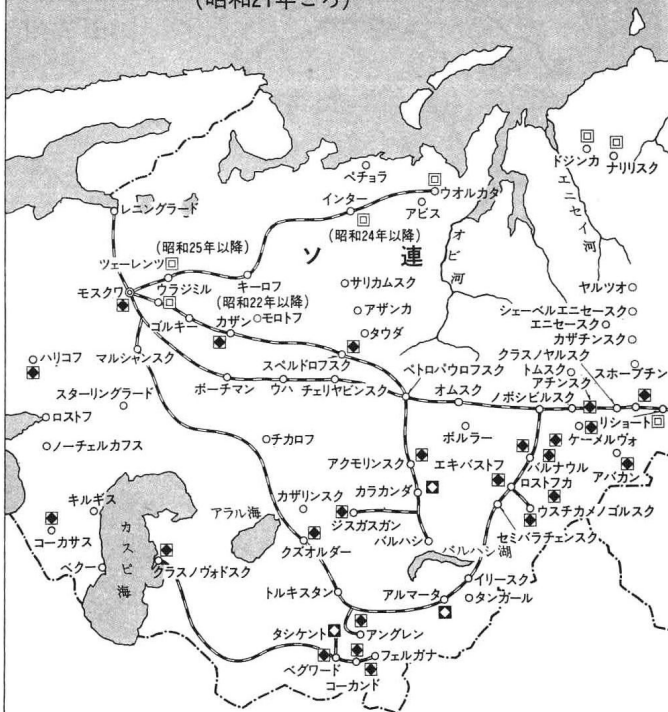


外 蒙 古

中 国

ソ連領内日本人収容所分布概念図

(昭和21年ごろ)



■ 2万人以上 ◼ 1万人以下

◼ 1万人以上 ◻ 少数人員

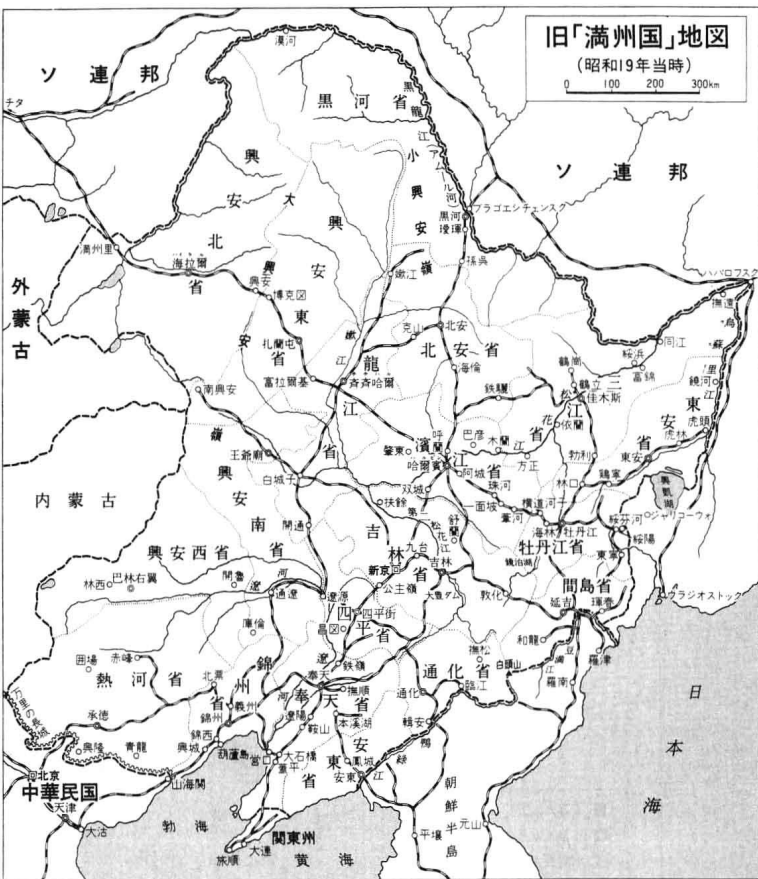
/// 収容所が密集していた地域

記号は収容所地区の中心地

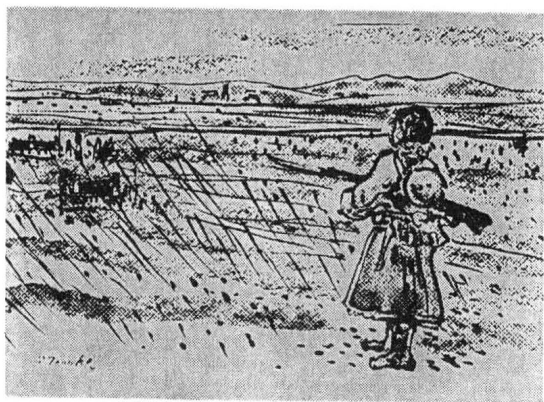
(防衛庁ならびに厚生省の資料から作成)

(昭和19年当時)

0 100 200 300km



ソ連参戦



虎林障地からウスリー江越しにソ連領を望む

混乱の始まり

地図で見ると旧満州、朝鮮半島、ソ連との国境が入り交じっているように見える満州東部の国境守備隊陣地、虎頭、五家子（琿春南方約三十キロ）から「ソ連軍の砲撃を受けている」との第一報が第一方面軍司令部（牡丹江）に入ったのが昭和二十年八月九日午前零時であった。相次いで東部正面の国境守備隊からも同様の入電があり消息を断った。第一方面軍司令部はソ連の本格的な進攻が開始されたとの判断に立たざるをえなかった。

新京にあった関東軍総司令部（山田乙三大将）に第五軍（第一方面軍隷下）の情報参謀前田忠雄中佐から緊急電話が入ったのは午前一時であった。前田参謀はさらに「東寧、綏芬河にもソ連軍が攻撃を始めた。牡丹江はソ連機によって空襲を受けている」と報告して電話を切った。

関東軍はソ連の進攻に備えて東正面、北正面、西正面の三つに分けて兵力を配備していた。まず東正面から「ソ連進攻」の第一報が入ったことは、他の二方面からも進攻してくる可能性があることを示唆した。関東軍司令部内には殺氣が漂った。

同一時三十分、新京郊外の寛城子が空襲を受けた。いきなり満州の中枢部に攻撃を仕かけてきたことは、ソ連が国境を越えて三正面からなだれこんでくる意思を持っていることの証明であった。果たせるかな、北正面守備隊から「ソ連軍が黒竜江の渡河を始めた」と報告が入り、西正面

守備隊からは「満州里の国境監視哨を急襲され、有力な機械化部隊がハイラル方面に進出するもよう」との報告が入った。こうなつては、ソ連が全面戦争に踏み切つたと判断する以外にない。一方的なソ連の武力攻撃はこうして開始された。

関東軍総司令官山田大将は大連に出張中であつたため、総参謀長秦彦三郎中将が大本営に急報（電話）すると同時に、全部隊に対して「全面開戦準備」を指令、さらに「それぞれの作戦計画に基づき進入してくる敵を破砕すべし」と下令した。

関東軍からの急報に接した大本営も、また驚きを隠さなかつた。この時期「本土決戦」を叫ぶ主戦派と、日本降伏を求めた連合国のポツダム宣言の受諾をめぐつて、軍部首脳、政府要人の間で対立が続いていた。

が、だれよりもソ連進攻の事実を知つて困惑したのは大本営参謀総長梅津美治郎大将、参謀次長河辺虎四郎中将、東郷茂徳外務大臣ら少数の「和平派」であつた。武力進攻を開始して来たソ連に、連合国との和平仲介を工作していたのである。

ソ連は日本と中立条約を結んでいる唯一の国であつた。昭和二十年四月五日、ソ連は日ソ中立条約を延長しない旨、通告してきたが、条約はまだ有効であり、モスクワには佐藤尚武大使、東京にはマリク大使が駐在していた。六月中旬から「ソ連を仲介とする対米和平」の工作がひそかに進められ、具体的には七月十二日、天皇の特使として「近衛文麿元総理を派遣したのでソ連の意向を調整するよう」、外務省はモスクワの佐藤大使に訓電していた。

この和平工作の推進論者の一人だった河辺参謀次長が、ソ連の参戦を知り「ソ連に対する判断

を誤った」と八月九日の手記に書いているほど、日本にとっては「寝耳に水」であり、広島への米国の原爆投下を待っていたかのような武力進攻を開始したソ連の行動は日本人の理解を超えるものであった。河辺手記は政府、軍上層部の情報収集能力、国際感覚の欠如を物語ると同時に、日本人の「お人好し」の証明とも受け取れよう。

歴史的な事実から見ればソ連の武力進攻は「無通告」であり計画的なものであった。ソ連がソ満国境から進攻してきた九日午前零時の段階では、日本人でソ連の「対日宣戦布告」の事実を知っていたのは、クレムリンでモロトフ外相から文書を送りつけられた佐藤大使一人である。

佐藤大使は「和平仲介」をソ連に告げ、モロトフ外相との面会を求めている。スターリン首相、モロトフ外相ら首脳はポツダム会談に出掛け、八月六日帰国した。翌七日クレムリンから電話があり「八日午後八時（日本時間九日午前二時）にモロトフ外相が見える」と言ってきた。しばらくして「午後五時（日本時間八日午後十一時）にしたい」と変更申し入れがあった。佐藤大使は和平の仲介依頼が可能になったものと考え、クレムリンを訪れた。が、あいさつもそこそこ、モロトフ外相が佐藤大使に手交したのは対日宣戦布告文であった。「無線を使って日本に打電してよい」と言いながら、どうした理由か、大使の打った電文は日本に届かなかった。届いたとしても手の打ちようはなかったらう。

日本がソ連の対日宣戦布告を知ったのは、すでにソ連が武力進攻を開始した四時間後、モスクワから打電されたタス通信を傍受してからである。当時、外国と通信できる無線機を持っていたのは軍部以外には外務省ラジオ室と同盟通信社などにしかなかった。松本俊一外務次官は「九日

早朝、外務省ラジオ室からと同盟からとの電話によってソ連の参戦を知った」と言っている。

佐藤駐ソ大使が、モスクワから発信したはずの「ソ連、対日宣戦布告」の電文が日本に届かなかったことを裏付けるいま一つの証言は、同盟通信社海外局長谷川才次氏の談話である。昭和二十二年、『婦人公論』八月号に同社の求めに応じて語った内容だ。「九日（昭和二十年八月）午前四時ごろ（同盟からの）電話でソ連が日本に宣戦布告したことを伝えてきた。これはタス通信を受信したのです。それを東郷（茂徳外相）さんと迫水（久常内閣書記官長）さんに知らせたときに、二人とも意外のような口ぶりで、東郷さんなどは『ほんとうか』となんべんも念を押すのだな。というのは仲介の労を依頼して、いい返事のくるのを待っていたところだから」と語っている。

「仲介の労」とはソ連を通じての日米和平工作のことである。ソ連がヤルタで米英と対日参戦の密約を結んでいたことなど、日本はまったく知らなかったのである。

マリク駐日大使が、東郷外相に面会を申し入れてきたのは九日の朝である。日本から日米和平の仲介を頼まれながら、日本があと一押しで倒れようという時期を見はからったように、武力進攻を行い、対日宣戦布告をしたことを知っていた東郷外相は、マリク大使の面会申し入れを鼻白む思いで聞いたであろう。

ソ連参戦とわかった以上、外相にとってはポツダム宣言の受諾回答をまとめることが最優先課題である。外相は面会を翌十日に延期し、ポ宣言受諾の方向へ必死の努力を続けた。そのうち長崎への原爆投下の情報が入り、軍部の抗戦派の力が急にしぼんだ。ポ宣言が出された七月二十六

日以来、上層部は受諾、拒否をめぐって大ゆれにゆれていた。九日夜、決定は御前會議に持ち込まれ、十日午前二時半、ついに天皇の発言によって受諾が決まる。

十日午前六時四十五分、スイス加瀬俊一、スウェーデン岡本季正公使に第一電を打電し、事実上の日本降伏の意思表示が行われたのである。

外相とマリク大使との会談が行われたのは十日午前十一時十五分から十二時四十分までの一時間二十五分である。マリク大使は形式通り対日宣戦布告文を読み上げた。宣戦の理由は骨子だけでも知っておく必要があるだろう。外務省資料からみる。

「ヒットラードイツの壊滅及び降伏後においては日本のみが引続き戦争を継続しつつある唯一の大國となれり。日本兵力の無条件降伏に関する本年七月二十六日付のアメリカ合衆國、英國及び支那（中國）三國の要求は日本により拒否せられたり。これがため極東戦争に關し日本政府よりソ連邦に対しなされたる調停方の提案は總ての根柢を喪失するものなり」

ソ連の言い分はまだ続く。

「日本が降伏を拒否せるに鑑み^{かんみ}連合國は戦争終結の時間を短縮し、犠牲の数を減縮し^か且つ全世界における速やかなる平和の確立に貢獻するためソ連政府に対し日本侵略者との戦争に参加するよう申し出でたり。

總ての同盟の義務に忠実なるソ連政府は連合國の提案を受理し本年七月二十六日付の連合國宣言に加入せり。斯^かの如きソ連政府の政策は平和の到来を早からしめ今後の犠牲及び苦難より諸國民を解放せしめ且つドイツが無条件降伏拒否後体験せる如き危険と破壊より日本國民を免るること

とを得せしむる唯一の方法なりとソ連政府は思考するものなり。

右の次第なるをもつてソ連政府は明日、即ち八月九日よりソ連邦は日本と戦争状態にあるものと思ふことを宣言す」

ソ連の対日宣戦布告文に注釈を加えると「本年七月二十六日付のアメリカ合衆国……」とあるのはポツダム宣言を意味し「……ソ連政府に対し日本侵略者との戦争に参加するよう申し出でたり」とあるのは二十年二月四日から十一日までルーズベルト（米）、チャーチル（英）、スターリン（ソ連）の三首脳がソ連のクリミア半島のヤルタに集まって開催されたヤルタ会談を意味している。いわゆる「ヤルタの密約」と呼ばれているもので、主題はドイツ敗戦後の処理であるがごく秘密裡に「①ドイツ降伏後二、三ヵ月を経てソ連が対日参戦する②その代償としてソ連は樺太の南半分とこれに隣接する島嶼、千島列島の領土権を獲得する」という密約が交わされた。密約の締結日は二月十一日である。

このヤルタの「密約」は戦後の二十一年二月十一日、米國務省から公表されている。ルーズベルトは急死したため回想録はない。チャーチルの回顧録『第二次世界大戦』にはポーランド問題については多く書かれているが、日本問題については一行の記述もない。一説にはチャーチルは「遠慮」して署名はしたが会議には出なかったと言われている。

戦後、数多くの研究が行われ、ヤルタの密約はルーズベルトの失政とか、疾病のため（事実二ヵ月後の四月十二日、脳出血で急死）判断力を失っていたともいわれている。ヤルタ会談の時点では米国の原爆開発の見通しは立たず、ソ連を対日参戦させることによって日本降伏を一日でも